

星あかり

泉鏡花

青空文庫

もとより何故なにゆえという理わけはないので、墓石の倒れたのを引摺ひきずり寄せて、二ツばかり重ねて台にした。

その上に乗つて、雨戸あまどの引ひき合せの上の方を、ガタガタ動かし見たが、開あきそうにもない。雨戸うちの中は、相州西鎌倉みだればし乱橋橋の妙長寺みょうちようじという、法華宗ほっけの寺の、本堂とに隣となつた八畳の、横よこに長い置床おきどこの附いた座敷で、向つて左手ゆんでに、葛籠つづら、革鞆かばんなどを置いた際きわに、山科やましなという医学生が、四六しろうくの借蚊帳かりかやを釣つて寝て居るのである。

声を懸けて、戸とを敲たたいて、開けておくれと言えば、何なにの造作ぞうさはないのだけれども、止よせ、と留とめるのを肯きかないで、墓原はかはらを夜

中に徘徊はいかいするのは好いい心こころもち持もちのものだと、二ツ三ツ言いい争あらそつて出でた、いまのさき、内うちで心張棒しんぱりぼうを構かえたのは、自分を閉出しめだしたのだと思うから、我慢にも恃たのむまい。……

つめたつめた冷せきとうい石塔せきとうに手を載せたり、湿しめりくさ臭臭い塔婆とうばを掴つかんだり、花はなづ筒つの腐くされみず水水に星の映るのを覗のぞいたり、漫そぞろあるき歩歩をして居たが、藪やぶが近く、蚊かが酷ひどいから、座敷の蚊帳が懐なつかしくなつて、内へ入ろうと思つたので、戸を開けようとすると思つたことに気がついた。

それから墓石に乗つて推おして見たが、原もとより然そうすれば開あくであらうという望のぞみがあつたのではなく、唯ただ居いるよりもと、徒いたずらに試あみたばかりなのであつた。

何にもならないで、ばたりと力なく墓石から下りて、腕を拱こまぬぎ、
 差俯さしうつむ向いて、じつとして立つて居ると、しつきりなしに蚊たかが集
 る。毒虫が苦しいから、もつと樹立こだちの少い、広々とした、うるさ
 くない処をと、寺の境けいだい内に気がついたから、歩き出して、卵らんと
 塔場うばの開戸ひらきどから出て、本堂の前に行つた。

然さまで大きくもない寺で、和尚と婆ばあさんと二人で住む。門まで
 僅わずか三四間けん、左手ゆんでは祠ほこらの前を一坪ばかり花壇にして、松葉牡丹まつばぼたん、
 鬼百合おにゆり、夏菊なつぎくなど雑まぜ植うえの繁つた中に、向日葵ひまわりの花は高く蓮はすの
 葉ごとの如く押被おつかぶさつて、何時いつの間にか星は隠れた。鼠ねずみ色いろの空
 はどんよりとして、流るる雲も何なんにもない。なかなか気が晴せい々せい
 しないから、一層海端いつそうみばたへ行つて見ようと思つて、さて、ぶらぶ

ら。

門の左側に、井戸が一個。ひとつ。飲水のみみずではないので、極めて塩ツ辛

いが、底は浅い、屈かがんでぎぶぎぶ、さるぼうで汲くみ得えらるる。石

しだたみ ほりおろ 暈あわせめで穿下した合目には、このあたりに産する何とかいう

蟹かに、甲良こうらが黄色で、足の赤い、小さなのが数限かぎりなく群むらつて動いて

居る。毎朝この水で顔を洗う、一杯頭から浴びようとしたけれど
も、あんな蟹は、夜中に何をするか分らぬと思つてやめた。

門を出ると、右左、二畝ふたうねばかり慰みに植えた青田あおたがあつて、

向う正面の畦あぜな中に、琴弾松ことひきまつというのがある。一昨日おとつの晩宵ばんようの

口に、その松のうらおもてに、ちらちら灯ともが見えたのを、海浜かいひん

の別荘で花火を焚たくのだといい、否いや、狐火きつねびだともいった。その

時は濡れたような真黒な暗夜やみよだったから、その灯ひで松の葉もすらすらと透すきとお通とおるように青く見えたが、今は、恰いまも曇あたかった一面の銀ぎ泥んでいに描いた墨絵のようだと、熟じつと見ながら、敷しきいし石いしを踏ふんだが、カラリカラリと日和ひよりげた下駄したの音の冴さえるのが耳に入こって、フと立たちと留まった。

門外おもての道は、弓形ゆみなりに一条ひとすじ、ほのぼのと白く、比企ひきヶ谷やつの山やまから由井ゆいヶ浜はまの磯いそぎわ際ぎわまで、斜ななぬささぎに鵜うの橋はしを渡わたしたよう也なり。

ハヤ浪の音が聞えて来た。

浜なみりの方がわへ五六間進かかむと、土橋ひとつが一架、並なみりの小さなのだけれども、滑なめり川がわに架かかったのだの、長谷はせの行合ゆきあい橋はしだのと、おなじ名なに聞きえた乱みだればし橋はしというのである。

この上で又た立停たちとまつて前途ゆくてを見ながら、由井ヶ浜までは、未まだ三町ばかりあると、つくづく然そう考かんえた。三町は蓋けだし遠い道ではないが、身体からだも精神も共に太いたく疲れて居たからで。

しかしそのまま素直まっすぐに立たつてるのが、余り辛つらかったから又た歩あいた。

路みちの両側しばらくのあいだ、人家じんかが断たえては続いたが、いづれも寝静ねじままって、白しろけた藁屋わらやの中に、何家どこも何家どこも人の氣勢けはいがせぬ。その寂せき寞ぼくを破やぶる、登あし音が高いので、夜更よふけに里さと人の懐疑うたがいを受けはしないかという懸念たれから、誰たれも咎とがめはせぬのに、拔足ぬきあし、差足さしあし、音は立てまいと思おもうほど、なお下駄げだの響ひびきが胸を打うつて、耳みみを貫つらぬく。

何なにか、自分は世よの中なかの一切いっぺつのものに、現在いま、慙かく、悄しよんぼり然然、
 夜露よつゆで重おもツくるしい、白地しろじの浴衣ゆかたの、しおたれた、細こい姿さで、首こうべ
 を垂たれて、唯一た一人、由井ヶ浜へ通たざる砂道たどを辿たどることを、見みられ
 てはならぬ、知られてはならぬ、気取けどられてはならぬというよう
 な思おもいであるのに、まあ！ 廂ひさしも、屋根も、居酒屋の軒のきにかかつた
 杉の葉も、百姓屋の土間どまに据すえてある粉こな挽ひき臼うすも、皆目をを以てて、
 じろじろ睨ねめるようで、身みの置おき処どころないまでに、右みぎから、左ひだり
 ら、路みちをせばめられて、しめつけられて、小さく、堅かたくなつて、
 おどおどして、その癖か、駆かけ出でそうとする勇氣ゆうきはなく、凡およそ人間おとこ
 の歩行あゆみに、ありツたけの遅おそさで、汗あせになりながら、人家とこのある処ところ
 をすり抜ぬけて、ようよう石地蔵いしじぞうの立たつ処ところ。

ほつと息をすると、びようびようと、頻しきりに犬の吠ほえるのが聞えた。

一つでない、二つでもない。三頭みつも四頭よつも一斉に吠え立てるのは、丁ちようど前途ゆくての浜際はまぎわに、また人家が七八軒、浴場、荒物屋あらものやなど一廓ひとくるわになつて居いるそのあたり。彼処あそこを通とおりぬ抜ぬけねばならな
いと思うと、今度は寒氣さむけがした。我ながら、自分を怪あやむほどであるから、恐ろしく犬を憚はばかたものである。進ひまれもせず、引返ひきかえせば再び石臼いしうすだの、松の葉だの、屋根にも廂ひさしにも睨にらまれる、あの、この上うえもない厭いやな思おもいしなければならぬの歟かと、それもならず。静じつと立つてると、天窓あたまがふらふら、おしつけられるような、しめつけられるような、犇ひしひし々と重いものでおされるような、切せつ

ない、堪たまらない気がして、もはや！ 横に倒れようかと思つた。

処へ、荷車が一台、前方むこうから押寄せるが如くに動いて、来たのは類ほおかぶり被ひをした百姓である。

これに夢が覚めたようになって、少し元気がつく。

曳ひいて来たは空からくるま車まで、青菜あおなも、藁わらも乗つて居はしなかつた

が、何故なぜか、雪の下の朝市に行くのであらうと見て取つたので、

なるほど、星の消えたのも、空よどが淀んで居るのも、夜明まに間のな

い所せ為いであらう。墓はかはら原へ出たのは十二時過すぎ、それから、ああし

て、ああして、と此処ここまで来た間きあいだのことを心に繰返して、大分だいぶん

の時間が経たつたから。

と思う内に、車は自分の前、ものの二三間隔げんたる処から、左の

山道やまみちの方へ曲つた。雪の下へ行くには、来て、自分と摺れ違つて後方うしろへ通り抜けねばならないのに、と怪みながら見ると、ぼやけた色で、夜の色よりも少し白く見えた、車も、人も、山道やまみちの半あたりなかばでツイ目のさきにあるような、大きな、鮮あざやかな形で、ありのまま衝つと消えた。

今は最もう、さつきから荷車たぐすべが唯ただこつてあるいて、少しも輾れきろく輾れきろくの音の聞えなかつたことも念頭に置かないで、早くこの懊おう惱のうを洗い流そうと、一直線に、夜明に間もないと考えたから、人ひとは憚からず足早あしはやに進んだ。荒物屋あらものやの軒下のきしたの薄暗うすくらい処ところに、斑ふち犬いぬが一頭、うしろ向むきに、長く伸びて寝て居たばかり、事なく着いたのは由井ヶ浜である。

へきすいきんさ
 碧水金砂、昼の趣とは違つて、
 おもむき
 趣とは違つて、
 りようぜん
 霊山ヶ崎の突端と小坪
 さき
 山ヶ崎の突端と小坪
 とつばな
 の浜でおしまわした遠浅は、暗黒の色を帯び、伊豆の七島も見
 とおあさ
 遠浅は、暗黒の色を帯び、伊豆の七島も見
 あおうなばら
 蒼海原は、さき濁に濁つて、果なくおつかぶさつた
 にごりにご
 さき濁に濁つて、果なくおつかぶさつた
 はて
 果なくおつかぶさつた
 うずだか
 ように堆い水面は、おなじ色に空に連つて居る。浪打際は綿を
 つらな
 空に連つて居る。浪打際は綿を
 なみうちぎわ
 浪打際は綿を
 わた
 綿を
 つか
 束ねたような白い波、波頭に泡を立てて、どうと寄せては、
 なみがしら
 波頭に泡を立てて、どうと寄せては、
 あわ
 泡を立てて、どうと寄せては、
 よ
 寄せては、
 ぎつと、おうように、重々しゅう、翻ると、ひたひたと押寄せ
 おもおも
 重々しゅう、翻ると、ひたひたと押寄せ
 ひるがえ
 翻ると、ひたひたと押寄せ
 るが如くに来る。これは、一秒に砂一粒、幾億万年の後には、こ
 りゆう
 一秒に砂一粒、幾億万年の後には、こ
 の大陸を浸し尽そうとする処の水で、いまも、瞬間の後も、咄嗟
 のち
 瞬間の後も、咄嗟
 とつさ
 のさきも、正に然なすべく働いて居るのであるが、自分は余り大
 まさ
 正に然なすべく働いて居るのであるが、自分は余り大
 陸の一端が浪のために喰欠かれることの疾いのを、心細く感ずる
 くい
 のために喰欠かれることの疾いのを、心細く感ずる
 はや
 の疾いのを、心細く感ずる
 ばかりであつた。

妙長寺に寄宿してから三十日ばかりになるが、先に来た時分とは
 涙が著しく縮まって居る。町を離れてから浪打際まで、凡そ
 二百歩もあつた筈なのが、白砂しらすなに足を踏掛けたと思つと、早や
 爪つまさき先が冷く浪のさきに触れたので、昼間は鉄の鍋で煮上げたよ
 うな砂が、皆ずぶずぶに濡れて、冷こく、宛然網の下を、水が
 潜くぐつて寄せ来るよう、砂地に立つても身体が揺ゆらゆらそうに思われ
 て、不安心でならぬから、浪が襲うとすたと後あとへ退き、浪が
 返るとすたと前へ進んで、砂の上に唯一人やがて星一つない
 下に、果のない蒼海あおうみの浪に、あわれ果敢はかない、弱い、力のない、
 身体ひと単個もつて弄あそばれて、刎返はねかえされて居るのだ、と心着こころづいて悚然ぞつ
 した。

時に大浪が、一あて推寄せたのに足を打たれて、気も上ずつて
 踳よろ踳よろけかかった。手が、砂地に引上げてある難破船の、纜わづかにそ
 の形を留めて居る、三十石積こくづみと見覚えのある、その舷ふなばたにかかっ
 て、五寸釘をヒヤヒヤと掴つかんで、また身震みふるいをした。下駄はさつ
 きから砂地を駆かける内に、いつの間にか脱いでしまつて、跣はだし足で
 ある。

何故なぜかは知らぬが、この船にでも乗つて助かろうと、片手を舷
 に添えて、あわただしく擦すりあが上ろうとする、足が砂を離れて空くうに
 かかり、胸が前屈まえかがみになつて、がつくり俯向うつむいた目に、船底に
 銀のような水が溜たまつて居るのを見た。

思わずあツといつて失望した時、轟ごうごうごう々轟ごうごうごうという波の音。山を

くつがえ
覆したように 大 畝おおうねりが来たとばかりで、—— 跣足はだしで一文字いちもんじに
ひきかえ
引返したが、吐息といきもならず——寺の門を入ると、其処そこまで隙間すきま
もなく追おひすが継がつた、灰汁あくを覆かえしたような海は、自分の背せなかから放れ
て去いつた。

引き息とびつで飛着とびついた、本堂の戸を、力まかせにがたひしと開ける、
屋根の上で、ガラガラという響ひびき、瓦かわらが残らず飛とび上あがつて、舞立まいたつ
て、乱みだれ合あつて、打破うちやぶれた音がしたので、はツと思うと、目が
眩くらんで、耳が聞えなくなつた。が、うツかりした、疲つかれ果はてた、
倒たおれそうな自分の体は、……夢中で、色の褪あせた、天井の低い、
皺しわだらけな蚊帳かやの片隅かたすみを掴つかんで、暗くなつた灯ひの影かげに、透すかし
て蚊帳うちの裡のぞを覗のぞいた。

医学生は肌脱はだぬぎで、うつむけに寝て、踏返ふみかえした夜具やぐの上へ、両足を投懸なげかけて眠つて居る。

ト枕を並べ、仰向あおむけになり、胸の上に片手を力なく、片手を投出し、足をのばして、口を結んだ顔は、灯の片影かたかげになって、一人すやすやと寝て居るのを、……一目見ると、それは自分であつたので、天窓あたまから氷を浴びたように筋すじがしまった。

ひたと冷い汗つめたになって、眼を睜みひらき、殺されるのであろうと思ひながら、すかして蚊帳の外を見たが、墓原をさまよつて、乱橋から由井ヶ浜をうろついて死にそうになつて帰つて来た自分の姿は、立つて、蚊帳に縋すがつては居なかつた。

もののけはいを、夜毎よごとの心持こころもちで考えると、まだ三時には間ま

があつたので、最^もう最^もうあたまがおもいから、そのまま黙^もつて、母上の御名^{おんな}を念じた。——人は慍^こういうことから気が違^{ちが}うのであろう。

青空文庫情報

底本：「書物の王国」 分身」国書刊行会

1999（平成11）年1月22日初版第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第四卷」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年3月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星あかり

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>